

原 著

在宅知的障害者の介護者の負担度の研究
——改訂 CCI による調査と在宅老人介護者との比較——

緒方正名¹⁾ 笹井 學¹⁾ 畑本勲治²⁾ 増田玲子²⁾

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科¹⁾
社会福祉法人 閑谷学園²⁾

(平成10年5月20日受理)

An Analysis of the Home Caregivers' Burden in
caring the Intellectually Disabled
—— Survey by Modified CCI and Comparison with
Home Caregivers of the Impaired Elderly ——

**Masana OGATA¹⁾, Manabu SASAI¹⁾, Kunji HATAMOTO²⁾
and Reiko MASUDA²⁾**

1) *Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan*

2) *Social Welfare Juridical Person
Shizutani Gakuen
Wake, 709-0403, Japan
(Accepted May 20, 1998)*

Key words : home caregiver, intellectually disabled, impaired elderly,
cost of care index

Abstract

The home caregivers' physical and mental burden in caring for the intellectually disabled was examined using a questionnaire, modified Japanese version of the Cost of Care Index. The questionnaire was sent to 85 caregivers. Differences in workload between the caregivers for the intellectually disabled and those for the impaired elderly from previous reports were analyzed by statistical method and revealed the following.

Generally speaking, the workload of the caregivers of the intellectually disabled was less than that for the caregivers of the impaired elderly.

The intellectually disabled work in a sheltered work institution, during which caregivers are relieved from the burden of care.

In contrast, caregivers for the impaired elderly must give care all day long. Therefore, programs for short stay and day care in medical welfare institutions for the impaired elderly are needed. The greatest concern of the caregivers of the intellectually disabled was health problems in the future.

要 旨

本調査においては、知的障害者に対する在宅介護者の介護負担度を探るために、介護者の負担感を反定量的に評価する指標として開発された Cost of Care Index (CCI) を導入し、岡山県内の各福祉作業所で働く知的障害者の保護者の方 (85名) と自宅で老人の介護をしている在宅介護者 (270名) を調査対象にして、その負担感の違いに焦点を当て両者の差異を比較検討した。

その単純集計の結果から、①社会的制約、②心身の健康、③意欲、④不愉快、⑤経済的負担の5つについて統計的手法で比較したところ、すべてにおいて老人の在宅介護者の方が、知的障害者の在宅介護者よりも負担を感じていることが明らかになった。これは、知的障害者の在宅介護者の方は、被介護者である知的障害者が日中は福祉作業所で働いているため、介護の必要性がないが、老人の在宅介護者の方は、一日の大半を介護に費やさなければならぬという時間的問題及び被介護者である高齢障害者の ADL の低下が要因と考えられる。そこで対策として、高齢障害者の在宅介護者の方は、ショートステイ、デイサービス、ホームヘルプサービスなどの社会的資源を活用し、介護の負担を減らすことが望まれる。

また、在宅知的障害者の介護者自身が感じている問題として最も多かったものは、健康についての将来への不安で、半数近くの人が不安を感じていることが明らかになった。

緒 言

厚生省による精神薄弱者福祉対策基礎調査 (平成7年) によれば、わが国における在宅の精神薄弱者は、29万7000人と云われており、障害者を出来る限り在宅で生活出来るよう社会の諸条件の整備が福祉施策の柱¹⁾とされている。在宅で介護される方の介護負担度が心配されている。

この点から、精神薄弱者の介護に着目し、介護者の肉体的、精神的、経済的な負担度を調査して、これを改善するように努力することは、介護の保健 (予防) 衛生上必要なことである。特に精神薄弱者の介護者は、心身の健康と介護の意欲の負担が大きいと考えられる。

そこで、介護者の負担感を半定量的に評価する指標として、Cost of Care Index (CCI)²⁾ の日本語訳を³⁾を精神障害者の介護者に適用するよ

うに改編し、これを用いて、介護者に及ぼす負担を ①介護者の個人的社会的制約、②介護者の心身の健康、③介護者の精神薄弱者の介護に対する意欲、④被介護者の態度について介護者の感じる不愉快なこと、⑤介護者の経済的負担、という5つの視点から現在在宅で精神薄弱者の介護を実施している者を対象にして調査を行い、前報⁴⁾による在宅高齢障害者の介護者の介護負担度と比較した。

調査の概要

調査対象は、岡山県内の各福祉作業所 (清輝橋〇〇〇作業所、ワークショップ〇〇〇、倉敷市児島〇〇作業所、み〇〇〇作業所、み〇〇作業所、浦安〇〇〇センター〇、〇授産所、灘崎町〇〇〇園、あ〇〇〇園、総社市〇〇作業所、も〇〇〇作業所) で、働く知的障害者の方の保護者の方、102名であった。その調査期間は、1997

年7月とした。本調査における実質回答者数は85名となった。また有効回収率は、83.3%であった。

今回の調査には、高齢者の介護をしている介

護者の負担感を半定量的に評価する指標として開発された Kosberg 等の Cost of Care Index (CCI)²⁾を溝口らが邦訳したもの³⁾を在宅知的障害者の介護者用に改変したものをを用いた(表1)。

表1 在宅知的障害者・介護者の介護負担度のアンケート (CCI より改変)

社会的制約：

- 4. 知的障害者の介護のために、あなた自身のための時間が、十分に取れなくなってしまった(取れなくなりそう)だと思いますか。
- 9. 知的障害者の介護は、あなたのご家族の間に緊張をもたらしている(もたらさそう)と思いますか。
- 11. 知的障害者の介護のために、あなたのご自宅での日課が、めちゃくちゃになっている(なるだろう)と思いますか。
- 19. 知的障害者の介護のために、あなたやご家族の友人をあなたの家へ招くことができなくなった(できなくなりそう)と思いますか。

心身の健康：

- 3. 知的障害者の介護のために、あなたやご家族の健康が損なわれている(損なわれそう)と思いますか。
- 8. 知的障害者の介護のために、あなたの食欲がなくなってしまった(なくなりそう)と感じますか。
- 14. 知的障害者の介護のために、あなたは肉体的に疲れ切っている(疲れ切ってしまいそう)と感じますか。
- 18. 知的障害者の介護のせいで、あなたは将来に不安を感じるようになりましただか(感じるようになりそうですか)。

意欲：

- 1. 知的障害者には、自分は大切に必要人間だと思われたいという欲求がありますが(あるとしたら)、それを満足させてあげようと努力するのは無意味だと思いますか。
- 6. 知的障害者の健康をよりよくしようと努力するのは無意味だと思いますか。
- 13. 知的障害者の日用品を充足させようと努力するのは無意味だと思いますか。
- 17. 知的障害者には、だれかと友達付き合いをしたいという要求がありますが(あるとしたら)、それをかなえてあげようと努力するのは無意味だと思いますか。

不愉快：

- 2. 知的障害者はあまりにも多くの要求をするので面倒を見きれない(見きれそうもない)と感じますか。
- 7. 知的障害者は自分の思い通りにあなたを動かそうとしている(動かそうとするだろう)と思いますか。
- 12. 知的障害者の介護のために、あなたやご家族はとてもイライラさせられている(イライラさせられそう)と思いますか。
- 16. 知的障害者には、必要のないことまで世話をしてくれとあなたに要求しているように(要求しそうだ)と感じますか。

経済的負担：

- 5. 知的障害者の介護のために、他の事のためにと思っていた貯蓄に手をつけざるをえない(手をつけざるをえなくなるだろう)と思いますか。
- 10. 知的障害者の介護にかかわる出費のために、ご家族やあなた自身にとって必要なものをあきらめざるをえない(あきらめざるをえなくなるだろう)と思いますか。
- 15. 知的障害者の介護にかかわる出費のためにあなたやご家族は余分な支出をする余裕がなくなってしまった(なくなってしまいそう)と思いますか。
- 20. 知的障害者の介護には、費用がかかりすぎる(かかりすぎるだろう)と思いますか。

各質問項目の選択肢は、a、絶対にそうは思わない、b、そうは思わない、c、そう思う、d、絶対にそうだと思う、の4つからなっている。

(質問項目の番号は、使用する際の質問表の番号を示す。)

CCIの20項目は介護者に対して次の5分野から評価するよう組み立てられている。すなわち、①介護者の個人的社会的制約(項目4, 9, 11, 19), ②介護者の心身の健康(3, 8, 14, 18), ③介護者の高齢者の介護に対する意欲(1, 6, 13, 17), ④被介護者の態度について介護者が感じる不愉快なこと(2, 7, 12, 16), ⑤介護者の経済的負担(5, 10, 15, 20)の5分野である。形式は介護者に対する質問表となっており、介護者自身が質問紙に記載する方法を取った。各質問の回答は「a, 絶対にそうは思わない」「b, そうは思わない」「c, そう思う」「d, 絶対にそうだと思う」の中から一項目を選択するLikert typeの回答方法を用いた。

在宅知的障害者の介護負担度と在宅高齢障害者の介護負担度の比率の差異に対する統計処理は χ^2 検定⁵⁾⁶⁾により有意性の検討を行なった。

結 果

1. 在宅介護者及び要介護者の概要

在宅介護者の年齢区分は、29歳以下が2.59%, 30～39歳が19.4%, 40～49歳が20.77%, 50～59歳が22.07%, 60～69歳が29.87%, 70歳以上が5.1%であった。

被介護者との続柄は、両親が88.75%, その他として、兄弟、甥などが11.25%であった。また、両親の中でも主に介護に携わるのは、母親であり、介護には女性の負担が大きいことが示された。

被介護者の障害の程度は、A判定(重度)が34.28%, B判定(中・軽度)が65.71%であった。

介護を行う上で困っていることのアンケートとして、こだわりが28.73%, 多動が8.04%, 自傷他傷が5.74%, 発作(てんかん等)が12.64%, パニックが9.19%, 生活一般(食事・着替え・排泄等)が20.68%その他が14.94%であった。

2. CCI準拠アンケートによる在宅知的障害者の介護者についての介護負担度の高得点項目とその背景

各質問項目及び質問項目グループ別の4段階評価の百分率、得点の算出法、及び平均得点を表2に示す。

1) 介護者の個人的社会的制約

介護者自身の個人的社会的制約を探る質問項目の中で最も介護者が負担を感じているのは、問4の「知的障害者の介護のために、あなた自身のための時間が、十分に取れなくなってしまった(取れなくなりそうだ)と思いますか。」(平均得点2.15)及び問9の「知的障害者の介護は、あなたのご家族の間に緊張をもたらしている(もたらすだろう)と思いますか。」(平均得点2.11)である。後者のような結果が得られた背景には、被介護者である知的障害者には、『こだわり』、『多動』、『自傷他傷』、『発作(てんかん等)』、『パニック』などが見られるため、常に介護者は被介護者に注意を払っていなければならないためだと思われる。

2) 介護者の心身の健康

介護者の心身の健康をはかる質問項目の中で最も介護者がより負担を感じているものは、問18の「知的障害者の介護のせいで、あなたは将来に不安を感じるようになりましたか(感じるようになりそうですか。)」(平均得点2.51)であり、各20問の質問項目の中で、一番介護者が負担を感じているものであった。このような結果が得られた背景には、介護者と被介護者の続柄で最も多かったのが親子であり、自分(介護者)が年をとっていくにつれて、子供(被介護者)の将来のこと、また介護を行う上で自分(介護者)の体力的な問題について考えているためと思われる。次いで問14の「知的障害者の介護のために、あなたは肉体的に疲れ切っている(疲れ切ってしまいそうだ)と感じますか。」(平均得点2.04)であった。

3) 介護者の知的障害者の介護に対する意欲

知的障害者の介護に対する精神的側面を意欲をその少なさとして捉え、探る質問項目の中には、特に介護者が負担を感じているものは見られなかった。このような結果が得られた背景には、介護者と被介護者との続柄が親子であることや、介護者の年齢が40～60歳代と働き盛りなので、まだまだ意欲的に介護を行っているように思われる。そして意識の低さについての得点の低いものは、このグループでは、問1の「知的障害者は、自分は大切で必要な人間だと思わ

表2 在宅知的障害者の介護者のCCI準拠・各質問項目の回答比率, 平均得点と在宅高齢障害者の介護者のCCIのそれぞれとの比較

	項目	絶対にそう は思わない	そうは思わ ない	そう思う	絶対にそう だと思う	得点* 知障介護者	得点* 高障介護者	回答数 知障介護者
社会的 制約	問4	15.5	54.9	28.2	1.4	2.15	2.78	84
	問9	19.4	50.0	30.6	0	2.11	2.43	85
	問11	22.1	72.1	5.9	0	1.84	2.38	81
	問19	23.9	56.3	18.3	1.4	1.97	2.33	84
	平均	20.2	58.3	20.8	0.70	2.02±0.58**	2.48±0.49**	84
健康 の 負担	問3	19.7	66.2	14.1	0	1.94	2.53	84
	問8	39.7	54.4	4.4	1.5	1.68	2.11	81
	問14	14.1	67.6	18.3	0	2.04	2.57	84
	問18	5.6	43.7	45.1	5.6	2.51	2.59	84
	平均	19.8	58.0	20.5	1.78	2.04±0.52**	2.45±0.48**	83
介護 意 欲 少	問1	56.5	40.6	2.9	0	1.46	2.03	82
	問6	53.6	42.0	1.4	2.9	1.53	1.84	82
	問13	30.0	67.1	1.4	1.4	1.74	1.87	83
	問17	33.8	57.7	5.6	2.8	1.77	1.98	84
	平均	43.5	51.9	2.8	1.78	1.63±0.49**	1.93±0.43**	83
不 愉 快 さ	問2	29.6	59.2	8.4	2.8	1.84	2.06	84
	問7	27.5	53.6	17.4	1.4	1.93	2.39	82
	問12	9.9	60.6	29.6	0	2.20	2.62	84
	問16	15.5	73.2	8.5	2.8	1.99	2.14	84
	平均	20.6	61.7	16.0	1.75	1.99±0.53**	2.30±0.45**	84
経 済 的 負 担	問5	19.7	49.3	29.6	1.4	2.13	2.51	84
	問10	20.6	64.7	13.2	1.5	1.96	2.26	82
	問15	21.1	64.8	12.7	1.4	1.94	2.21	84
	問20	11.3	67.6	18.3	2.8	2.13	2.44	84
	平均	18.2	61.6	18.5	1.78	2.04±0.58**	2.36±0.50**	84

単位：%, 知障＝在宅知的障害者, 高障＝在宅高齢障害者, *＝文献[4]から引用得点の算出法：a, 絶対にそうは思わない＝1点, b, そうは思わない＝2点, c, そう思う＝3点, d, 絶対にそうだと思う＝4点, **＝各回答者について, 5グループ中の各グループに属する4質問項目の平均値を算出し, 総ての回答者についての平均値から回答者一人に対する総平均を算出したもの。

れたいという欲求がありますが(あるとしたら), それを満足させてあげようと努力するのは無意味だと思いますか。」(平均得点1.46)であり満足させることを有意義としていると考えられている。

4) 被介護者の態度について介護者が感じる不愉快なこと

被介護者の態度について介護者が感じる不愉快のものを探る質問項目の中で最も介護者が負担を感じているものは, 問12の「知的障害者の介護のために, あなたやご家族はとてもしら

らさせられている(イライラさせられそうだと思いますか。」(平均得点2.20)である。このような結果が得られた背景には, 被介護者である知的障害者には『こだわり』と呼ばれる同じ行為の繰り返しが見られるためではないかと思われる。

5) 介護者の経済的負担

介護者の経済的負担を調べる質問項目の中で, 最も介護者が負担を感じているものは, 問5の「知的障害者の介護のため, 他の事のためにとっていた貯蓄に手をつけざるをえない(手を

表3 在宅知的障害者の介護者及び在宅高齢障害者の介護者の CCI 準拠及び CCI 各質問項目の肯定率の差

分類	項目	在宅知的障害者*			在宅高齢障害者*			肯定比率の差異 検定 (χ^2)
		否定数	肯定数	肯定比率	否定数	肯定数	肯定比率	
社会的 制約	問4	107	64	37.4	60	137	69.5	p<0.01
	問9	100	66	39.8	104	82	44.2	(-)
	問11	135	13	8.2	121	64	34.6	p<0.01
	問19	115	43	27.2	122	59	32.6	(-)
	計	457	185	28.8	407	242	37.3	p<0.01
健康 の 負担	問3	126	30	19.2	93	105	53.0	p<0.01
	問8	119	13	9.8	145	41	22.0	p<0.01
	問14	124	39	23.9	89	106	54.4	p<0.01
	問18	84	112	57.1	83	99	54.4	(-)
	計	453	194	30.0	410	351	46.1	p<0.01
介護 意欲 少	問1	113	6	5.0	138	48	25.8	p<0.01
	問6	113	11	8.9	176	22	11.1	(-)
	問13	135	7	4.9	185	7	3.6	(-)
	問17	124	20	13.9	159	24	13.1	(-)
	計	485	44	8.3	658	101	13.3	p<0.01
不 愉 快 さ	問2	123	26	17.4	160	32	16.7	(-)
	問7	111	40	26.5	105	78	42.6	p<0.01
	問12	111	63	36.2	85	109	56.2	p<0.01
	問16	133	28	17.4	152	41	21.2	(-)
	計	478	157	24.7	502	260	34.1	p<0.01
経 済 的 負 担	問5	102	67	39.6	105	93	47.0	(-)
	問10	120	31	20.5	127	59	31.7	p<0.05
	問15	125	28	18.3	144	51	26.2	(-)
	問20	122	47	27.8	104	75	41.9	p<0.05
	計	469	173	26.9	480	278	36.7	p<0.01

単位=%, 検定 (-) = p > 0.05. * = 文献 [4] から引用. 検定 = 表2において a, b を肯定 c, d を否定として算出.

つけざるをえなくなるだろう) と思いますか。」(平均得点2.13) 及び問20の「知的障害者の介護には、費用がかかりすぎる(かかりすぎるだろう) と思いますか。」(平均得点2.13) である。このような結果が得られた背景には、被介護者である知的障害者は、日々、各福祉作業所で働いているが、多くの福祉作業所に見られるように、その賃金は安い。そのため、福祉作業所は、知的障害者にとって、働く場所というよりは、生活する場所に近いように思われる。そのため、作業所では、収入が見込めないように思われる。尚、各グループ別の得点は、心身の健康・経

済的負担 > 社会的制約 > 不愉快 > 意欲の順序であった。

3. アンケートに見られる「在宅知的障害者の介護者」と「在宅高齢障害者の介護者」の比較

その成績は、表3に示す。

1) 介護者の個人的社会的制約

介護者自身の個人的社会的制約を探る質問項目は、問4, 9, 11, 19, である。社会的制約グループの平均について、在宅知的障害者の介護者の肯定率(28.8%)と在宅高齢障害者の介護者の肯定率(37.3%)の間に2×2分割につ

いての χ^2 検定の結果³⁾, $\chi^2=10.5$ であり, 統計的有意差 ($P<0.01$) が認められた.

これらの4つの項目の中で問4の「(知的) 障害者の介護のために, あなた自身のための時間が十分に取れなくなってしまった(取れなくなりそうだ)と思いますか。」という質問項目の中の問4に注目して見ると在宅高齢障害者の介護者の方が69.5%も負担を感じているのに対して, 在宅知的障害者の介護者の方はわずか37.4%しか負担を感じていない. そして, 両比率間には有意の差異 ($p<0.01$) が認められた. このような結果が得られた背景には, 老人の在宅介護者は, 一日の内の大半を被介護者と過ごしているのに対し, 知的障害者の在宅介護者の方は, 被介護者が福祉作業所へ行っているため, 日中は自分の時間があり, ゆとりがあるように思われる. 従って時間的なゆとりについては, 老人の在宅介護者の方がより多くの負担を感じていることが示された.

また, 問11の「(知的) 障害者の介護のために, あなたのご自宅での日課がめっちゃくちゃになっている(なるだろう)と思いますか。」についても, 在宅高齢障害者の介護者の方が34.6%も負担を感じているのに対して, 在宅知的障害者の介護者の方はわずか約8.2%しか負担を感じていない. 両比率には有意の差異 ($p<0.01$) が認められた. その理由は問4とほぼ等しいと考える.

2) 介護者の心身の健康に対する負担

介護者の心身の健康をはかる質問項目は, 問, 3, 8, 14, 18である. これらの総計(グループ平均)を在宅知的障害者の肯定率(30.0%)と在宅老人障害者の介護者の肯定率(46.1%)にそれぞれまとめて集計した. その結果, 両者間に多くの統計的有意差がみられた. 即ち, これら4つの質問項目の中で 2×2 分割についての χ^2 検定の結果, 両比率間に統計的有意差($P<0.01$) が認められた.

個々の質問項目では, 問3「知的障害者の介護のために, あなたやご家族の健康が損なわれている(損なわれそうだ)と思いますか.」に注目してみると, 在宅高齢障害者の介護者の方は, 53.0%の人が負担を感じているのに対して, 在宅知的障害者の介護者の方は, 19.2%の人し

か負担を感じていない. また, χ^2 検定の結果, 両比率間に統計的有意差 ($P<0.01$) が認められた.

同様に, 問8「知的又は高齢障害者の介護のために, あなたの食欲がなくなってしまった(なくなりそうだ)と感じますか.」, という質問項目, また問14「知的又は高齢障害者の介護のために, あなたは肉体的に疲れ切っている(疲れ切ってしまいそうだ)と感じますか.」でも, 両比率の間に統計的有意差 ($P<0.01$) が認められた.

このような結果が得られた背景には, 在宅知的障害者の介護者の方は, 多くの被介護者が自分で生活一般(食事・着替え・排泄等)ができるため, 介護によって心身の健康を損なうことが少ないと考えられる. 従って心身の健康については, 在宅高齢障害者の介護者の方が高齢者の多い事もあり, より多くの負担を感じていることが示された.

3) 介護者の知的障害者の介護に対する意欲の少なさ

知的障害者の介護に対する精神的側面を意欲として捉えて探る, 個々の質問項目は, 問1, 6, 13, 17である.

これら4項目合計(グループ平均)において, 在宅知的障害者の介護者の肯定率(8.3%)と在宅高齢障害者の介護者の肯定率(13.3%)の差異について, 4分表による検定の結果, $\chi^2=7.77$ で統計的有意差 ($P<0.01$) が認められた. これら4つの項目の中, 個々の質問項目では, 問13「(知的) 障害者の日用品を充足させてあげようと努力するのは無意味だと思いますか.」に注目してみると, 在宅知的障害者の介護者は5.0%しか負担を感じていないが, 高齢障害者の介護者は25.8%が負担を感じており両者の比率の間に統計的有意差 ($P<0.01$) が認められた. これは, 知的障害者の介護者の場合には, 被介護者を子供としてとらえ, 意欲的に介護に携わっているように思われる.

4) 被介護者の態度について介護者が感じる不愉快なこと

被介護者の態度について介護者が感じる不愉快なことを探る質問項目は, 問, 2, 7, 12,

16, である。

これら4項目合計(グループ平均)において、在宅知的障害者の介護者の肯定率(24.7%)と在宅高齢障害者の介護者の肯定率(34.1%)について、4分表による検定の結果、 $\chi^2=7.77$ であり、統計的有意差($P<0.01$)が認められた。

これら4つの質問項目の中で2×2分割についての χ^2 検定の結果、統計的有意差($P<0.05$)が認められた個々の質問項目では、問7「知的または老人障害者は自分の思い通りにあなたを動かそうとしている(動かそうとするだろう)と思いますか。」、問12「知的または老人障害者の介護のために、あなたやご家族はとてもしらさされている(イライラさせられそう)だと思いますか。」という質問項目の中の問12に注目してみると在宅高齢障害者の介護者の方は、約56.2%の人が負担を感じているのに対して、在宅知的障害者の介護者の方は、約36.2%の人しか負担を感じていない。 χ^2 検定の結果、統計的有意差($P<0.01$)が認められたこの質問項目の解釈は『要求の量・内容・介護者の受け止め方』によって負担の感じ方が異なってくるように思われる。

5) 介護者の経済的負担

介護者の経済的負担を探る質問項目は、問、5, 10, 15, 20, である。

これら4項目合計(グループ平均)において、在宅知的障害者の介護者の肯定率(26.4%)と在宅高齢障害者の介護者の肯定率(36.7%)について4分表による検定の結果、 $\chi^2=15.07$ で統計的有意差($P<0.01$)が認められた。

個々の質問項目では、「介護の為の出費の為に必要なものをあきらめざるを得ない」質問には、知的障害者の介護者の得点が、老人障害者のそれより有意($p=0.05$)に低かった。しかし、その他の3項目は、有為差は認められなかった。此の様な結果の背景では、知的障害者の施設における給料では、家計を支えるには充分でないと考える。

6) 総合的評価

1)~5)を総合して、在宅知的障害者の介護者、在宅高齢障害者の介護者ともに、介護を家族の問題と考え、家族構成員である被介護者の

要求に対して、家族全体のこととして、対応していこうとしているように思われる。

なお、負担度の得点で、5グループの平均値(表2)の比較では、両障害者の間に有意な差異($p<0.01$)は認められ、グループ計の肯定比率、否定比率間の差異(表3)と略等しい成績が認められた。

考 察

本研究の結果から、在宅知的障害者の介護者に比べて、在宅高齢障害者の介護者のほうが、①社会的制約、②心身の健康、③意欲、④不愉快、⑤経済的負担の5つすべてにおいて、負担を感じていることが明らかになった。

①社会的制約において、時間的制約を探る質問では、知的障害者の在宅介護者に比べて在宅高齢障害者の介護者のほうは、倍近い人が負担を感じている。これは、在宅知的障害者の介護者のほうは、被介護者である知的障害者が日中は福祉作業所で働いているため自分の時間を持つのに対して、老人の在宅介護者のほうは、1日の大半を被介護者と過ごさなければならないため、なかなか自分の時間が持てないためだと思われる。

②心身の健康において、肉体的疲労を探る質問では、知的障害者の在宅介護者に比べて在宅高齢障害者の介護者のほうが、倍近く負担を感じている。これは、知的障害者の在宅介護者のほうは、多くの被介護者が自分で生活一般(食事・着替え・排泄等)ができる。このことから健康の問題は、被介護者の能力の差が関係していると思われる。

③意欲においては、あまり差はなく、また、在宅知的障害者の介護者、在宅高齢障害者の介護者ともにあまり負担を感じていなかった。

④不愉快を探る質問においては、知的障害者の在宅介護者に比べて、在宅高齢障害者の介護者のほうがより多くの負担を感じていた。この質問項目の解釈は、被介護者からの要求の量、その内容、また、介護者の要求に対する受け止め方によって負担の感じ方が違ってくるように思われる。

⑤経済的負担(表3)においては、在宅知的

障害者の介護者の負担ありとする比率は、在宅高齢障害者の介護者に比べて、有意に低かった。但し、問10及び問20以外に有意の差はなかった。また両介護者共に肯定比率は、健康の負担、社会的制約に次いだ値であった。この事は、在宅知的障害者の介護者、在宅高齢障害者の介護者ともに、家族の一員である被介護者の要求に対して、出来るだけ対応していこうとしているように思える。

以上をまとめると、在宅知的障害者の介護者の問題点においては、被介護者である知的障害者特有の『こだわり』、『多動』、『自傷他傷』、『発作(てんかん等)』、『パニック』などの行為が在宅介護において、①社会的制約や④不愉快にお

ける介護負担の大きな要因になるように思われる。また、各20問の質問項目の中で、在宅介護者が最も介護負担を感じている質問内容は、将来のことである。これは、介護者と被介護者の続柄で最も多かったのが親子であり、自分の子供(被介護者)のことで、将来の高齢による介護の不安について考えているためと思われる。

知的障害者の在宅介護が在宅福祉政策の柱とされる現在¹⁾に於いて、介護者の負担とその対策が必要とされ、本報がその基礎資料として使用されれば幸いと考える。この研究は在宅⁴⁾、施設⁷⁾における介護者の負担度、疲労度の研究の一部として行なわれたものである。

文 献

- 1) 厚生統計協会編(1997)国民福祉の動向, 44(12), 160—163.
- 2) Kosberg JI, and Cairl RE (1986) The Cost of Care Index : A Case Management Tool, for Screening Informal Care Providers. *The Gerontologist*, 26(3), 273—278.
- 3) 溝口 環, 他 (1995) Cost of Care Index を用いた老年患者の介護負担度の検討. 日本老年医学会誌, 32(6).
- 4) 緒方正名, 当瀬美枝, 山田寛子 (1997) 在宅ケアにおける介護負担度の検討 — 社会的・身体的・精神的・経済的視点から —. 川崎医療福祉学会誌, 7(1), 19—32.
- 5) 岩淵千明編, あなたもできるデータの処理と解析. 初版, 福村出版, 東京, pp 150—151, pp 222—222.
- 6) 大崎紘一, 菊地 進, 緒方正名 (1978) コンピュータ・プログラムによる統計技術. 同文書院, pp 79—82.
- 7) 緒方正名, 山田寛子, 当瀬美枝 (1997) 老人保健施設に勤務する介護者の負担度の測定とその対策. 川崎医療福祉学会誌, 7(1), 33—45.